

## ◎全国で4万4000人が挑戦＝通算第6回検定を実施

日本語の総合的な運用能力を測定する「日本語検定」（略称・語検）の平成21年度の第2回（通算第6回）検定は、11月6、7の両日行われました。国内の一般会場が115都市の124会場、準会場が1077会場で、海外でも香港やロンドン、台湾各地などで行われ、受検者数は、およそ4万4000人でした。



「語検」は、敬語や文法、語彙（ごい）、表記、言葉の意味、漢字の6領域について能力を測るものです。前回から新たに小学校低・中学年レベルの7級が設けられ、小学生から社会人まで幅広い年齢層を対象としています。検定結果は、12月上旬ごろにホームページで合否速報が行われ、その後受検者個人に合否通知が発送されます。

### ◇問題点を把握したい＝東京・尾久第六小学校

近くに隅田川が流れる東京・荒川区の尾久第六小学校（長谷川秀紀校長、児童数447人）では、希望者82人が土曜スクールの時間を利用して団体受検しました。

1学期にも50人が団体受検しており、今回は、1年生から6年生までの82人がテスト開始の合図とともに問題に挑戦しました。

同校は、国語力向上のため、朝の読書活動や図書館指導員、保護者のボランティアの協力を得て、児童が本に親しむ活動を積極的に推進し、読書の目標を達成した児童を表彰しています。さらに、長谷川校長自らが考えた漢字テスト「校長先生問題」を行い、1年間で学ぶ漢字の読みの力をつけています。



鶴田裕子副校長は、受検の動機について、「自分の日本語の力を総合的に測り、6つの領域でよく分かっていることや課題などを知ること。普段の学校での学習や家庭学習、生活の中での日本語の学び方、使い方を振り返り、さらには取り組み方を工夫する機会としたい。」などと説明。受検結果を分析して、

児童の国語力の問題点を把握し、補習や土曜スクールで、不足する部分を補っていくことにしています。

受検終了後、5年の女子児童は「難しかった。日ごろは先生に対する敬語の使い方などに注意しているが、今日ほど敬語を意識したことはなかった。」「読書は好きだが、文章題が難しかった。」などと感想を話しました。

#### ◇外国人対象、アジアで初めて＝香港

香港・尖沙咀（チムサアチョイ）の日本語学校では7日、アジアで初めて外国人対象の日本語検定が行われました。

この日の受検者は27人。語検を実施したSHIN日本語学校の運営会社取締役、宮脇繁氏によると、語検は今後も継続的に行う予定で、「香港では漫画など日本文化の人气が高く、その延長線上で日本語を学ぼうという人が多い」と話しました。

香港の日本語学習人口は推定3万人で、人口（700万人）に対する比率はほかの国・地域より高く、香港の日本語学習者は一定の資格を取得するまで勉強を続けるケースが多いと言われています。

